

# 日本ブロンテ協会関西支部 2026年大会プログラム

場所： 近畿大学 東大阪キャンパス 38号館 2階 S-202

(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3丁目 4-1 近鉄大阪線「長瀬」駅下車 徒歩約 10分)

日時： 2026年3月23日 (月) 13:30~17:10

司会： 井寺利奈 (近畿大学非常勤講師)

開会挨拶 (13:30~13:35)

開会の辞： 奥村真紀 (日本ブロンテ協会関西支部支部長・京都教育大学教授)

会長挨拶： 廣野由美子 (日本ブロンテ協会会長・京都大学国際高等教育院副教育院長)

研究発表 (13:35~14:05)

「信頼できない語り手」としてのロックウッドとネリー

行田英弘 (北海道大学大学院博士後期課程3年)

シンポジウム (14:20~17:00)

「<越境>の先にみえるもの」

ブロンテ／ロレンス／日本語文学／母語の外へ

司会・講師 岩上はる子 (滋賀大学名誉教授)

講師 奥村真紀 (京都教育大学教授)

講師 山内理恵 (神戸女学院大学教授)

講師 日比嘉高 (名古屋大学教授)

総会 (17:00~17:10)

閉会の辞： 清水伊津代 (日本ブロンテ協会関西支部顧問・元近畿大学教授)

懇親会 (17:40~19:40)

会場： THE LOUNGE (アカデミックシアター 4号館 3F)

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1 大阪工業大学 工学部総合人間学系教室 瀧川宏樹研究室内

TEL : 06-6167-5191 E-mail : bronte.kansai@gmail.com

## 研究発表

### 「信頼できない語り手」としてのロックウッドとネリー

行田英弘（北海道大学大学院博士後期課程3年）

エミリー・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-48）の『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）は、主要な語り手としてLockwoodとNellyの2人を有する。かれらは共に、しばしば「信頼できない語り手」（unreliable narrator）と評されてきたが、その人物像に注目すると、ロックウッドについては軽佻浮薄な南部の青年として批評家の間で評価が定まっているのに対し、ネリーに対する認識はよりニュアンスに富んでおり、必ずしも見解の一致を見ない。これは、2人の語りに質的な差異があることを示唆する。本発表では、James Phelanが一人称小説を論じた著作*Living to Tell about it*（2005）において定式化した「信頼できない語りの6つの型（six types of unreliability）」を参照しながら、その差異の性質と由来を追究したい。Phelanは6つの型を「mis型」と「under型」の2種に大別しているが、発表では、主にロックウッドを前者、ネリーを後者に当て嵌めて考察し、型の差異がアイロニーの表出、ひいては2人の語りから受ける印象の差異につながっていると主張したい。

## シンポジウム

### 「＜越境＞の先にみえるもの」

ブロンテ／ロレンス／日本語文学／母語の外へ

司会・講師 岩上はる子（滋賀大学名誉教授）  
講師 奥村真紀（京都教育大学教授）  
講師 山内理恵（神戸女学院大学教授）  
講師 日比嘉高（名古屋大学教授）

＜越境＞は今や物理的に「国境」を超えるというだけでなく、言語・文化・価値観などさまざまな境界を超える比喩的な意味をもっている。目には見えない境界を広げ／壊していく作家たちは、視線の彼方に何を見ているのだろうか。境を超えて「別の領域に入る」のではなく、「中間（あわい）に身をおく」ならば、そこにホミ・バーバの言う第三の空間（Third Space）が拓かれるのだろうか。

19世紀半ばに大陸への留学を果たしたブロンテ姉妹、20世紀初頭にメキシコやオーストラリアにまで移動したD.H.ロレンスにとって、越境は何を意味したのだろうか。また、グローバルな現代にあって複数の文化的・国民的アイデンティティ（あるいは流動的なアイデンティティ）をもつ作家たちにとって、母語以外の言語を選びとって創作することはどんな意味をもつのだろうか。近年、注目を集める「日本語文学」の展開、その一方で英語に背を向ける作家たちの言語意識など、本シンポジウムでは＜越境＞をキーワードに、言語文化の境界を大胆に踏み越え新たな地平を遠望したい。

## 外国語で書くということ——シャーロット・ブロンテの言語的越境

奥村真紀（京都教育大学教授）

19世紀に起きた輸送や通信の劇的な変化は人々の地理的距離感を大きく変え、物理的移動は個人のアイデンティティや価値観を揺るがす経験となった。ベルギーへの留学を経験したブロンテ姉妹にとって、国民的な空間から切り離された場所で異質な他者と出会う経験は何をもたらしたのだろうか。自作にほとんど外国語を取り入れなかったエミリの閉じられた言語空間に対して、シャーロットの経験した物理的越境は、母国語で書かれた作品の中にフランス語を積極的に取り入れるという言語的越境として現れている。本発表においては、シャーロットの作品における外国語の使用について考察する。

## 繰り返された＜越境＞——D. H.ロレンスの人生と創作

山内理恵（神戸女学院大学教授）

ノッティンガム大学の教授ウィークリーからドイツ人の妻フリーダを奪った26歳の春に、D. H.ロレンスは海外で過ごすことが多くなる。スキャンダルを起こして地元に住づらくなったことに加え、温暖な気候を求める彼の病弱な体質、母国で受けた作品の発禁処分、第一次世界大戦中につけられたスパイ容疑などが重なり、母国を避けがちになったようである。一方で、英国を出た彼は一カ所に定住せず、ヨーロッパ大陸、オセアニア、アメリカ大陸などを転々とした。そのため、彼の＜越境＞は母国からの逃避だけが目的ではなかったと思われる。本発表では、ロレンスが最後まで＜越境＞を繰り返した理由と、異国での体験が彼の執筆に与えた影響とを考察する。

## 「日本語文学」の越境——現代、そして現代まで

日比嘉高（名古屋大学教授）

リービ英雄、多和田葉子、デビット・ゾペティ、楊逸、田原、李琴峰、温又柔、グレゴリー・ケズナジャット——現代の日本では、数多くの越境的文学者が活躍している。少し定義の幅を広げれば、在日コリアンの作家ももちろんここに入るだろうし、数は減少しているものの、在外の日系人・日本人たちのアマチュア文学活動もある。越境的な文学活動を日本語で行う人たちの作品に、ここでは「日本語文学」という名をひとまず与える。この言葉は便利である一方、その線引きの仕方も、線引きする行為自体も、問題含みであるわけだが、ひとまずそれは措く。

この報告では、現代日本において「日本語文学」がどのような意味を持っているかを考える。具体的には李琴峰や、グレゴリー・ケズナジャット、デビット・ゾペティらの近作を取り上げながらそれを検討するが、同時に歴史的な視座も導入したい。それも長期の視座を。

リービ英雄は、『万葉集』の歌人山上憶良を、「日本語文学」の先駆者として取り上げた。憶良が、帰化人であることをリービは重視した。リービの試みを引き受け、私はさかのぼり、長期の文学的営為を視野に収めることで、現代文学の意義をもう一度考え直してみたい。わずかな事例しか見出せない前近代から、植民地帝国時代の移民送出と多民族化を経て、ポスト植民地主義、そして移民流入社会へと続く道程を、一度に見渡す。現代日本で活発に生み出されている「日本語文学」は、そうした長い長い道筋をたどり来たって、そして私たちの目の前にあると考えてみるのだ。

## 母語でないことばで書く人びと——多言語作家のもたらすもの

岩上はる子（滋賀大学名誉教授）

母語以外の外国語で書く作家といえば、日本語のリービ英雄、イタリア語のジュンパ・ラヒリ、ドイツ語の多和田葉子、韓国籍の李良枝や中国籍の楊逸など日本語で創作する作家たちが思い浮かぶ。これまで母語以外の言語で創作する作家の場合、その多くが植民地出身者であったり、政治的／宗教的迫害などを逃れた亡命者、経済的理由などによる移住者であったりするのに対して、現在の「移民作家」たちは自らの意志で国を離れ、外国語（それもあえてマイナー言語）を選び取っている点に特徴がある。ここでは異なる言語の狭間に生きる作家たちの言語意識を探りながら、かれらが多言語創作によって切り開こうとしている新たな文学の可能性について考えてみたい。